

## 巻頭言

# コロナ禍三年目の野外活動部

顧問 熊野谿 寛

2020年から始まったコロナ禍も三年目に入り、世界的には「出口」が見えてきたと言われた。第一次大戦中から戦後にかけてのスペイン風邪にして、世界的流行は3年位だったので、世界的なパンデミックはその位の時間が必要になる、という事なのかもしれない。

しかし、野外活動部について言えば、このコロナ禍はかなり破壊的な影響をもたらした。活動の中心である合宿が丸2年行えず、ようやく春休みに高校生だけで1泊の春合宿を真鶴で行う事は出来た。しかし、もともとこの部のコンセプトは「中学生も、高校生も上下に関係なく一緒にごった煮になって鍋をつつき、肉を奪い合う」という戦国時代も真っ青の混沌としたものだった。肉を奪い合うどころか、「中学生の合宿参加はダメ」という事では、活動の入り口からふさがれた事になる。それに、手間のかかる(?)中坊がないのでは、高校生はマジに上級生にはなれないし、部としての共通な経験も成り立たない。さらに夏も「2泊3日まで」「高校生だけ」という事では、勢いどうしても活動の求心力は下がらざるを得なくなった。

しかも、「2泊3日で合宿して行ける島」と考えた伊豆大島のキャンプ場は、人数規制で「最大8人まで」。ここに「引率は2名」と規定され、最大参加人数6名。大昔に生徒会指導主任をやった時に作った規定で「合宿の最低人数は5人」なので、5人か6人でなければならない。それでも高校生は「島に行きたい」という事で計画をすすめたが、「塾の講習で日程が合わない」「大島よりもっと遠い所に家族で行く」等のメンバーが出て、最低人数を切ってしまった。

かくて、今年の夏合宿も中止となった。コーチを依頼した卒業生には「自分らは問答無用だった。もったいない」と言われたが、3年もやらないと部の活動は実に怪しいものとなる。まあ、私が顧問でいるのは、最大でもあと2年。そろそろフェードアウトに向かうのが良いのだろうか。

最初に顧問をやったワングル、そして野外活動部。いずれも「ドツポにはまる」事を大切にしてきた。不便な各駅停車を乗り継いで出かけ、テントで押し合いながら寝たり、鍋や肉を奪い合い、臭くなった身体ととんでもない不便さと濃厚さ満喫する…そんな落とし穴みたいな濃密な世界は、多分、そうはない。さらりとスマートにできるアウトドアとは本質的に違う世界。そんな中に部の存在意義があったのだと思うのだが、さて、ポスト・コロナの世界で、人の関係性はどうなっていくのだろうか。

…てなことで、中心となる活動を奪われた野外活動部である。そんなコロナ禍三年目の展示と部誌をご高覧下さい。